

実践力を提供することができない ソーシャルワーク教育現場の課題

—社会人経験のある学生を通じて気が付いた大切な視点—

木下 一雄

(名古屋市立大学保健福祉学部社会福祉学科助教／コミュニティ福祉学科2004年卒業)

I. 研究の目的

精神保健福祉士養成において、2010（平成22）年の精神保健福祉士法改正により、実践力の高い精神保健福祉士を養成するための新カリキュラムが導入されている。そのため、各養成校では、新カリキュラムで志向されている実践力養成に向けた教育への模索が行われ、現場参加型実習のプログラム化を目指し始めた。

しかし現状としては、今の精神保健福祉士の養成校での教育内容が知識偏重主義で国家試験に合格するための知識を勉強することが中心になっているのではないかと教育現場で教えていて強く実感している。

その結果、国家試験には合格しても、ソーシャルワーカーにとって大切であるコミュニケーション能力や想像力、人権意識、共感性等が十分養われずに人と満足に話すことができなかつたり、相手の目を見て話ができなかつたり、相手の痛みや気持ちを理解することができないなどの問題を抱えている学生が数多く存在している。

結果として、現場で通用するような実践力が身に付かないうちに卒業を迎えることになってしまっている状況が多々散見されている。では、なぜ実習養成課程において精神保健福祉士としての現場での実践能力を養成することが難しい状況に陥ってしまうのかを検証する必要があると考えた。

その一例として社会経験が豊富で、即戦力として現場で活躍が期待されているすでに実践力が備わっていると思われる社会人学生を通じてソーシャルワーカーとしての能力や資質をアンケート結果をもとにして分析し、社会人学生から見えてくる様々な課題をもとに、現在大学で学んでいる学生にとっての実践力養成の重要な視点を解明していく。

II. 研究の方法

平成24年3月から平成26年3月まで、通信制の専門学校で教員として精神保健

福祉士の実習指導養成に携ってきた。その中で、社会人経験を経た実習生合計16名によるアンケート調査を実施した。

また、平成26年4月から平成27年3月まで勤務していた福祉系大学において自身が受け持っていた実習生（大学生）15名に対しても同様のアンケート調査を実施し、社会人実習生と通学生大学生との比較分析を行っていくことにした。

Ⅲ. 倫理的配慮

倫理的配慮として、調査時にアンケート調査の主旨と倫理について口頭にて説明し、結果等情報については、研究以外の目的には使用しないことを伝え了解を得ている。

Ⅳ. 平成24・25年度の通信制専門学校で学んでいた社会人実習生16名と平成26年度福祉系大学で学んでいた実習生15名に対する8項目のアンケート調査の比較分析結果

表1

①悩んだ時の相談の有無（実習指導者） 有意水準 n.p (0.749)

	社会人実習生	割合	木下クラス	割合
相談する	12	75%	12	80%
相談しない	4	25%	3	20%
合計	16	100%	15	100%
標準偏差	± 0.447		± 0.414	

②悩んだ時の相談の有無（実習担当教員） 有意水準 n.p (0.115)

	社会人実習生	割合	木下クラス	割合
相談する	5	31%	9	60%
相談しない	11	69%	6	40%
合計	16	100%	15	100%
標準偏差	± 0.479		± 0.507	

③養成校での勉強が実習の際に役に立ったか 有意水準 * 0.0002

	社会人実習生	割合	木下クラス	割合
役に立った	4	25%	13	81%
あまり役に立たなかった	12	75%	2	19%
合計	16	100%	15	100%
標準偏差	± 0.447		± 0.352	

④実習事前の学習体制が整っている 有意水準* 0.001

	社会人実習生	割合	木下クラス	割合
整っている	4	25%	12	80%
あまり整っていない	12	75%	3	20%
合計	16	100%	15	100%
標準偏差	± 0.447		± 0.414	

⑤実習事後の学習体制が整っている 有意水準* 0.0002

	社会人実習生	割合	木下クラス	割合
整っている	3	18%	12	80%
あまり整っていない	13	82%	3	20%
合計	16	100%	15	100%
標準偏差	± 0.403		± 0.414	

⑥養成校が身近な存在であった 有意水準* 0.001

	社会人実習生	割合	木下クラス	割合
身近な存在であった	4	25%	12	80%
身近な存在ではなかった	12	75%	3	20%
合計	16	100%	15	100%
標準偏差	± 0.447		± 0.414	

⑦実習中のサポート体制が整備されていた 有意水準* 0.0002

	社会人実習生	割合	木下クラス	割合
整備されていた	3	18%	12	80%
あまり整備されていない	13	82%	3	20%
合計	16	100%	15	100%
標準偏差	± 0.403		± 0.414	

⑧実習担当教員との関わりはあったか 有意水準* 0.0002

	社会人実習生	割合	木下クラス	割合
かなりあった	4	25%	13	86%
ほとんどなかった	12	75%	2	14%
合計	16	100%	15	100%
標準偏差	± 0.447		± 0.352	

有意水準* P < 0.05

V. 上記の平成24年・25年度の通信制専門学校で学んでいた社会人実習生16名と平成26年度福祉系大学において学んでいた実習生15名に対しての8項目のアンケート調査に対して分析した。

* 8項目中6項目において有意差が見られた。

社会人実習生は、①の項目を除いて、ほとんど勉強が実習に対して役に立たなかったと言った意見が多数を占めていた。

②実習担当教員への悩みの相談、③学校での学習、④・⑤実習事前・事後の学習体制、⑥学校の存在、⑦実習中のサポート体制の整備、⑧実習指導教員との関わりについての項目で8割近い社会人実習生が否定的な回答を示していた。

①の項目の実習指導者への相談に対して、悩んだときに多くの社会人実習生が相談しているのに対して、②の実習指導教員には、悩みを打ち明けずに実習を終える。実習指導者には相談できて、教員には相談しないといったことが浮き彫りになった。

自身が、実習巡回で実習先に訪問し、社会人実習生に対して30分近くスーパービジョンをして実習中の振り返りを行っていく際にも、実習生としての自己の実習における葛藤経験などのプロセスや自己への洞察に対しての質問がほとんどなく、「何とか、やっていけてます」と言った返答が戻ってくることが多かった。

社会人実習生は、実習中の巡回時面談での振り返りをしている最中の質問の多くが、実習中に本来向き合うべきクライアント（利用者）や援助における矛盾や葛藤など、自身の内的課題に対して問題点を掘り下げていくのではなく、実習先の施設や病院の経営方針や、職員管理、売り上げや職員のコンプライアンスやコストパフォーマンスなど、実習生としての視点ではなく、経営者的な視点からの発言が多く、実習生としての素直な感覚を見失い、実習生としての当事者意識が希薄であり、その殻から抜け出すことができないことが多々見られた。

社会人実習生は実習の中に、自らの社会人経験からの独自の価値観を持ち込み、自分の今までの経験や価値観を前提として、その自分の中にあるものさしに当てはまらないような考えは否定する傾向がみられる。

今までの経験上の中で感じ、思考するので、自分の中ですべてが実習する前からある程度完結しているため、実習先の欠点や施設の機能の状況を把握することに懸命になり、実習本来の意味を見失っている社会人実習生が多く存在している。

VI. 結果から見えてきた社会人実習生の実習指導の課題

新カリキュラムでは、学生と教員の間スーパービジョン関係を構築することが求められるように変更されてはいるものの、主に通信制に席をおいている多くの社会人学生は、教員と接する機会がスクーリングの授業の時と実習巡回の他はほとんどないといってもいいくらい直接関わるのが現状である。実

習巡回も実習中において一度限りのみのケースも多い。そのような中で、実習生の思考や想像力や問題解決能力に結びつけるための指導をすることができるとは言いがたい。

社会人実習生が陥る問題として、青木（2014）¹⁾は、著書の中で社会人経験が、養成校教員から受ける実習指導に対しての問題点をアンケート調査し、社会人経験がマイナスに作用した事柄を分析し、以下のようにまとめた。

表2 社会人経験がマイナスに作用した事項

上位5項目 n = 309

項目	人数 (%)
これまでの物の見方や価値観にとらわれた	170人 (55.9%)
自分の癖から抜け出すことが難しかった	108人 (35.5%)
これまでの物の見方や価値観にとらわれた	79人 (26.0%)
新しい対処法を身につけることが難しかった	45人 (14.8%)
わからないことを尋ねることへの躊躇や知ったかぶりをしてしまった	42人 (13.8%)

出典：青木聖久「新 社会人のための精神保健福祉士（PSW）」
『社会人経験をストレンクス（強さ・長所）にしたこれからの私』学文社 2014

実習後のアンケート調査によって、上記の5つの事項に対して実習中にとらわれてしまい、自身の思い込みから抜け出せずに、実習を行っていた。実際に、社会人実習生も、6割近く（55.9%）が、実習中において「これまでのものの見方や価値観にとらわれていた」と振り返っている。

アンケート結果（青木2014）から、社会人経験が自分の価値観や思い込みから抜け出すことが難しかったり、これまでの自分のやり方にとらわれたりするなど、かえって実習生としての学びを難しくさせていることが見て取れる。

このことから、社会人実習生の物事の見方を固定化させ、教員の指導を素直に受け入れられず、自身の経験をもとに価値観を形成している状況がより明確になってきた。

特に、今まで福祉現場で長年経験がある社会人実習生が実習先で起こしがちなこととして、実習先で実習生に成りきることができずに、現在従事している仕事の経験や価値観などにこだわりを持ち、実習先においても丸ごとそのままの自身の仕事の経験や価値観を持ち込んでしまうケースが浮きぼりになってきた。

このような状況は、ある一定の経験や知識を獲得することはできるが、新たな視点の多面的な考え方や他者の考え方の排除につながり、ソーシャルワーカーにとっての今後の成長にとってはかなりのマイナスにつながっていくことになってしまう。

Ⅶ. 考察

社会人実習生としてのアドバンテージは、今までの社会の中で身に付けた社会人としての経験値が主なものであり、以前に行った社会人実習生と福祉系大学に通学している学生との実習指導における調査研究においても、大学における現場実践に基づいたソーシャルワーク演習や少人数ゼミ方式で、徹底的に思考力を身に付けさせることを主眼においた実習指導を行うことにより、社会人実習生と福祉系大学生の能力差はほとんどなくなり、実習指導や演習を行っている教員の指導能力や学習指導の方法等によっては、必ずしも社会人実習生の能力が優位になるとは限らないことがアンケート調査で確認できている。

英語のことわざで、「Easy come, easy go」（簡単に手に入れたものは、簡単に失う）ではないが、安易に手に入る資格が、社会人実習生の精神保健福祉士としての専門性を失わせ、効率よく短時間で要領よく学習させ、表面的に分かったつもりになり、ソーシャルワークの本質に迫ることなくいつの間にか、国家試験勉強の末精神保健福祉士の資格だけ手にして、ソーシャルワーカーになったつもりになり卒業していく多くの社会人学生を目の当たりにしてきた。しいていえば、巡りめぐってそのことがソーシャルワーカー全体の価値を下げていくことにもなりかねないといった危惧は感じている。

現在、社会人で働きながら精神保健福祉士を取得することを目指している人の多くの人たちが通信制教育を経て、なるべく時間をかけずに精神保健福祉士の資格を手早く取得することを望んでいる。

つまり、講義形式でのスクーリング中心の授業を一方的に行っていたとしても、ソーシャルワーカーとしての知識や情報は付くが、本当の意味での精神保健福祉士としてのセンスでもいうべき想像力や思考力、人権意識などのもっとも大切な援助技術や能力が身につかないと言っても過言ではない。

通信制を主とする社会人実習生のように短期間のスクーリング講義とレポート学習を中心として、国家資格取得を目的としている資格取得主義的な考え方では、じっくり時間をかけて援助技術や価値観と向き合って学んできた学生とは、卒業後の精神保健福祉士の実践や姿勢においても歴然と差がつかってくるのである。

ここで、大切になってくることは、実習の最中に起こっている自己の体験としっかり向き合い、深く洞察し、他者と共に総合的に思考を掘り下げ、検討することによって自分自身の考え方や価値観が変化や成長を生み出すということを認識することが必要不可欠なのである。

実習による体験が実習生自身に定着するためには、失敗も含め実習中に起こったさまざまな経験や、葛藤、ジレンマ、無力感等を内省し、自覚しながら、実習体験の明確化、すなわち自分が体験した中で起こった事柄が自分にとって何だったのかを考え、自分なりに見極めようと試行錯誤をすることなのである。

この過程を経ずに実習、そして養成課程を修了し、ソーシャルワーカーとして実践現場に出てしまう多くの社会人実習生は、自分自身の過去の経験と照らし合わせ、その経験の中で成否を判断し、自身の今までの固定概念や価値観の中で物事を判断し、実習の過程の中で今までの自分自身の経験の中からの価値判断から抜け出すことができないループにはまり込んでしまい、そのことに気づかず援助実践を行っていくことになる。

VIII. 結論

精神保健福祉実習の現場実践における教育方法は、体験に裏付けられて初めて意味が出てくるのである。現場での実習体験におけるソーシャルワーク支援は、自分の生きてきた世界の枠の外にあり、自分と違った価値観や性質を有する精神障害を持つ人々と関わることから、より自分と他人の関係性について考える機会へと繋がっていくのである。

他者と自分の違いが当たり前存在するのと同じように、精神障害者の人々に関われば関わるほど、物事の取らえ方や物の見方、人生観の違いなどが、その人の一部分にすぎないといった実感に変化していくはずである。

精神障害者としてではなく、一人の人として真剣に関わり、向き合うことにより、その人の持っている人間性に触れることで、障害といった側面に注目するのではなく、その人自身の魅力が見えてくるのである。

尾崎は、「精神障害者の人々の生活困難は必ずその人独特の歴史をもち、現在の生活困難はその歴史に深く根ざしている。援助者が相手と自分の歴史に向き合おうとするとき、その人の暮らし、人の歴史と向き合おうとする姿勢を持ち、そして、人生のわからなさ、理不尽さ、矛盾などに向き合おうとすることが福祉には求められる²⁾と論じており、相手の生きている思い、事情、援助を求める動機、さらに相手の健康さ、社会関係などに対して多面的な想像力を育てることが大切なのであると述べている。

目の前にいるクライアントの人生に、どのような歴史があり、その歴史にいかなる悲しみの連鎖が刻み込まれているのか、相手が自分の未来をどのように考えているのかを見つめていく視点が必要不可欠である。

福祉の対象は物や人形ではなく目の前にいる人間そのものである。嬉しいこともあれば、悲しいこと、悔しいこと、情けないこと、傷つく事だってある。そのことなしに、ただ漠然と対人援助業務をこなしているだけでは、そのうちその人の人間の存在価値を認められず、ぞんざいに扱ったり、ひどい場合には虐待するようになる。

精神保健福祉実習の現場実践では、何よりも相手に対する想像力と自分と向き合う過程が必要である。実習とは、想像力を動員し、自分と向きあう経験を重ね

る機会である。むろん、実習を迎える前に、学生は制度や法律、価値観や倫理観、社会資源、社会福祉の歴史などへの知識も学び、身につける必要がある。しかし、何より獲得し、磨くべきもの、それは想像力と自分と向きあう力である。

精神保健福祉は一人ひとりの生活問題と向き合い、暮らし、人生にかかわる実践であり、一人ひとりの利用者とかかわり、制度や資源を活用しながら、生活の困難さをどう克服するかを、利用者と共に考えていく作業である。

私たちは、日常生活において、様々なことに出会い、気づき、考え、振り返るといった体験を繰り返しながら過ごしている。意識はしていないが、体験から様々なことを学び、そこから少しずつ成長している。このような日常を理論化し、現場実践に結び付けていくことが実習教育だと考える。

また、社会人での現場経験が豊富であればあるほど、学校での教育内容に対して「そんなのは私の方がよく知っている」という反発や葛藤が起こることがあるはずである。しかし、体験として理解していることと、理論や理念として理解していることとは違うので、体験を理解し実践していることが、その人、しいては精神保健福祉士としての援助につながっていくとは限らないのである。

社会人実習生は特に注意していかなければいけないことは、「わかったつもりにならないこと」なのである。今までの社会人経験にとらわれてしまうと、自由に物事を考えていく視点が失われていってしまうことにつながる。わかったつもりになってしまい、今までの考え方を押し通してしまい、そのことがいつの間にか自身の援助スタイルとして確立してしまう。自分の考え方が正しいと思い込んで、なぜその援助や支援が正しいのかさえ考えることをしなくなり、疑問を疑問に感じることなく、いつの間にか優しさや正義の押し売りが常態化していってしまうことになる。

社会人実習生から今回学んだ大切な視点は、自分の考え方や援助方法を疑ってかかる重要性にほかならない。わかっているつもりになり、自分の理論や実践を当たり前のように行ってしまっている無意識の危うさに気づかされた。

今回の検証によって、社会人経験や実践を積み重ねることにより、自分の中に確立される自信や援助といかに対峙し、自身の思い込みによる価値観や援助観と向き合い、その上で自身の中にある思い込みを自覚した上で払拭して、つねに様々な角度から相手の思いに寄り添い、相手に共感して、わかったつもりにならない支援や援助がいかに難しいことかを改めて認識することができた。

人は、長い期間経験することにより、そのことが実践の経験値と考え、経験年数こそがソーシャルワーカーにとっての良い実践や支援をすることの礎であると勘違いをし、援助の本質を見る目を曇らせ、目の前のクライアントの本当のニーズを見誤り、自己満足の思い込みによる援助を続けてしまうことに繋がっていく。

いかに、自分自身の思い込みによる支援を排除し、謙虚に他者のさまざまな価値

値観や人生観を多面的に受け入れることができるかが、ソーシャルワークの原点であり、そのことをしっかり理解することができる実習（演習）教育の原点に立ち戻ることこそが、実践力を提供するための教育現場にとって大切なのである。

今回の検証によって、社会人実習生の陥りがちな傾向を通じて、福祉系大学で学んでいる学生は他山の石として、日々の実習教育や演習に生かしていただいたい。

《引用文献》

- 1) 青木聖久「新 社会人のための精神保健福祉士」（PSW）
『社会人経験をストレンクス（強さ・長所）にしたこれからの私』 学文社 pp.189～193
2014
- 2) 尾崎新「利用者と向き合うこと ―ある実習ノートを通して―」
『立教大学コミュニティ福祉学部紀要』第8号 pp.41～54 2006

《参考文献》

- 1) 葛両久志『精神保健福祉士の専門職論～精神保健福祉上の専門職性要件の具体的状況～』弘前学院大学社会福祉学部研究紀要 第10号 pp. 111～23 2010
- 2) 小松尾京子 実習生としての成長を促す要因9に関する研究 ―通信教育課程におけるスクーリング受講前後の比較― 日本福祉大学社会福祉学部『日本福祉大学社会福祉論集』第127号 2012
- 3) 本郷秀和・松岡佐智 社会福祉援助技術現場実習の実習効果意識に関する一考察―福岡県立大学社会福祉学科学士の現場実習に関する意識調査より―福岡県立大学人間社会学部紀要 Vol. 15, No. 2. pp.13～26 2007
- 4) 精神科臨床サービス 第5巻1号〈特集〉新人に何を教えるか、どう教えるか』星和書店 200